

東京陵水

平成14年度総会
を成功させよう
陵水会東京支部役員一同

平成十四年度東京支部総会

大十四回卒企画のもと開催の運び

平成十四年度陵水会東京支部総会は、いよいよ来る六月六日(木)午後六時から、滋賀県人会東京支部(東織厚生年金会館)にて開催される運びとなった。

企画に当って次の談話を得た。総会の企画担当について支部から提案依頼を受けた時期はいつごろ。

いままで東京支部事務局で支部長を中心とするブレンスタツフが開催内容を決め、会の運営が進められて来ていたが、今回総会から、企画、運営を各卒業回次同期生が担当することとなり、今年度は大十四回卒生と一部十五回卒生が参加し担当することになった。

総会は新企画による内容豊富なものとなり、主催者側では会員の多数参加を大いに期待しているところである。

本紙編集部では初の企画に携わった大十四回卒生総会開催企画担当者として、小口晃、北村徹、古山捷二郎の三氏から、

目次

1	面	十四年度東京支部総会	9	面	西域紀行
2	面	「わたしの旅の印象」展開催	13	面	ゴルフ談義 困基会便り
3	面	陵水会主要支部の活動と抱負	13	面	計報
4	面	「卒業論文を返却します」	15	面	彦根コンフィデンシャル
5	面	対談「こんにちは」	15	面	編集室所感

た。その結果、話題の中で講師候補の推薦があったりして、参加に向けて大いに盛り上がりました。同期生全員の参加が大いに期待できます。最大の願いは首都圏会員が全卒業年次にわたって出席者を出して欲しいことです。

今回の記念講演の講師には、スポーツ評論家という異色な人選ですが、決定までのエピソードは、担当者(北村氏)が、会社関係者から得た情報により、石川顯氏のトークショーがたいへん好評だという話を聞き、直接交渉した結果、快諾をいただいた次第です。石川氏はかつてTBSのスポーツアナウンサーの時、田淵解説者(元阪神捕手)との即興の掛け合いが、当時評判になったというユーモラスなエピソードがあります。とにかく話題が豊富で話術も巧み聴衆をひきつける魅力があります。講演内容は大いに期待で

平成十四年度総会の概要

- (1)日時 平成十四年六月六日(木) 午後六時から
 - (2)会場 滋賀県人会 東京支部(東織厚生年金会館)
中央区東日本橋3-6-20
電話03(3661)5371
 - (3)会費 六千円(思い切った設定した)
 - (4)概要 議事…東京支部事務局
- (小池支部長) 来賓講話…滋賀大学 宮本憲一 学長(午後六時三〇分からの予定)
トークショー…スポーツ評論家 石川顯氏(午後七時から)
懇親会…参加会員



会場 東織厚生年金会館外観

●トークショーの内容と講師紹介

演題「プロ中のプロ」

一流と言われる人達から学んだこと

講師紹介 スポーツ評論家（元TBSアナウンサー）石川顯氏

一九四一年 神奈川県横須賀市生まれ
一九六四年 早稲田大学卒業
同年TBS入社

二〇〇一年 同社退社

現在 スポーツ評論家、二〇〇二年四月から関東学院大学、文教大学講師

TBS入社以来三十七年間、スポーツアナウンサー一筋で活躍。2000年シドニーオリンピック中継をはじめ、プロ野球、バレーボール、バスケットボール、アメフト、マスターズゴルフ等の球技から、マラソン、ボクシングやインディ500マイルレースといったモータースポーツまで幅広いキャリアを持つ。

特にキックボクシング中継で熱意を伝える名調子は語り種。「プロ中のプロであれ」を motto に日常の健康管理と徹底した事前取材を貫く。



（講師から一言メッセージ）

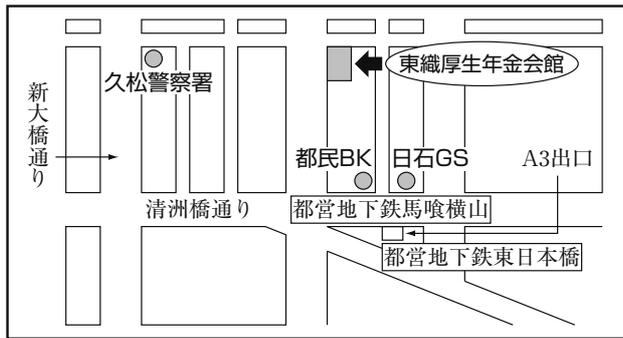
明るい顔の人は明るい人生を歩む。
暗い顔をした人は暗い人生しか歩めない。
常に明るい顔で人々に接してきたい。

（会場までの経路）

都営新宿線「馬喰横山駅」下車、A3出口⇩道路を挟んで都民銀行と日石GSの前に出る⇩道路を渡って先の銀行と日石の間をまがる⇩会場まで徒歩1分。

都営浅草線「東日本橋駅」下車、「馬喰横山駅」方面に向けて地下道を通り、A3出口に行く。その後は都営新宿線「馬喰横山駅」下車に同じ。

会場のビルには中段に「東織厚生年金会館」、上段に「東京滋賀県人会館」の看板が出ている。ビル一階にはレストラン「ピオラ」が入っている。（下図参照）



会場までの道順



代表幹事 左から古山、小口、北村の各氏

二〇〇二びわ湖・滋賀
「わたしの旅の印象」
観光文化展の開催

さる三月十二日から十四日まで、東京国際フォーラムEギャ

ラリーにおいて、滋賀県と（社）滋賀県観光連盟主催の、二〇〇二びわ湖滋賀「わたしの旅の印象」展示会が開催された。開催の実務は、千代田区有楽町の東京交通会館所在の滋賀県東京観光物産情報センターが担当した。

滋賀県は、京都府、奈良県に

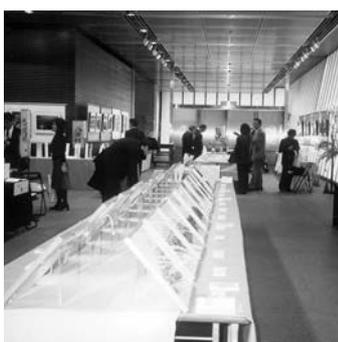
次ぐ歴史上の古社寺が多く、また琵琶湖というわが国第一の大湖の周辺に風光明媚な名所をおおく持ちながら、いま一つ観光県としての迫力が不足している、そこで首都圏において、滋賀県の歴史と伝統文化、詩情をさそう豊かな自然の魅力を一段と訴え、滋賀県を旅する人の更に増加してゆくことを期待して開催された。

従って展示品は、滋賀県を旅し住まいした時の魅力を印象付ける、風物を撮影した写真（第九回びわこフォトコンテスト入賞作品四十葉を主に）。東京在住の人々の句会十箇所から「天守閣淡海を臨み朝ぎくらの例にみる俳句。「抒情巡礼の一人

となりてあゆみおり近江の国なる彦根の町を」のように近江を歌った五歌会からの数品、二松学舎大学名誉教授岸哲男氏の「近江所々」他の和歌。

俳句、和歌については作者が自ら短冊に作品を認めたものが殆ど。旅行作家中村哲夫氏が描いた近江路の風景画、収集家が丹念に集めた明治、大正、昭和にわたる近江八景、彦根城などを主とする絵葉書百数枚、大正初期の全県地図と多方面で多きにわたった。

陵水会の参加については、滋賀県東京観光物産情報センターから「東京陵水」編集部に対し作品の提出参加を強く求められ、短歌の自由参加部門に和歌を数句提出した。主催者から、次回から陵水会の積極的な参加を期待するとの要請もあり、極力協力をしたいたい意向を伝えた。



会場風景

○京都支部の現況 京都支部長

堀 悦明(大3回)

陵水会京都支部は、昨年の総会を二十一世紀の初頭を飾るにふさわしい大会とすべく、大津、湖南支部との合同で開催しました。

講師として、樋口廣太郎名誉理事長をお招きし、「二十一世紀の日本経済の展望」と題して「小さな政府」「健全で創造的な競争社会」の構築という観点からの一時間半に亘る興味深いお話に一同感激致しました。

その後、7月の京都らしい平

成女鉦清音会の皆様の祇園囃子

に誘われて懇親会に移りましたが、出席者も両支部合わせて二百名近く、樋口名誉理事長と会

員との会話もはずみ、和気あいあいの意義あるひとときを過ごしました。

当支部は支部の運営に熱心なメンバーが多く、色々の催しを致しています。年一回、二千部の会報を発行するとともに、年二回のゴルフ会、卒業後二十年内の会員の懇親を深めるために催される夏の若鮎会、隔月第三金曜日の昼食を共にする三金会、年三回の幹事会、毎年母校で税理士、公認会計士を志望

する学生のための説明会を開催されている京都陵水会計人会が

あり、五年毎に京都支部会員名簿を発刊するとともに、常に支部からのお報せをホームページにのせています。

総会の出席率を良くするため、魅力ある講師を招くと共に、楽しいイベントを催すため智慧をしぼり、新卒会員には特に、会費を無料とし、樋口名誉理事長のご著作を贈呈しています。今後、会の充実のため役員一同で新しい施策を考えて行きたいと思えます。(機関紙「京都陵水」15号参照)

○福井陵水会の現況と抱負

福井陵水会事務局

水野 隆一(本24回)

「会員数」九十名余(ただし敦賀市以北)

「定例活動行事」一月・新年

会、三月・例会、五月・総会、六月・福井陵水ゴルフ大会、七月・例会、八月・福井県大学O Bゴルフ大会出場(第一回大会に優勝)、九月・例会、十月・福井陵水ゴルフ大会、十一月・例会。

「支部会員の参加意識と問題点および対策」概して中高年齢層の参加意識大(本部名簿平成

陵水会主要支部の姿と活動を聞く

陵水会の支部組織は全国的な広がりがあり、北は北海道支部から南は沖縄支部、更に台湾支部が加わり総計二十二支部となり、各支部とも活発な支部活動を展開している。折しも近い将来の国立大学独立行政法人化にむけて、母校が大きく変わろうとしている。この動きに連動して、これからの陵水会のあるべき姿、方向付け等につき模索するとともに、陵水会最大規模を持つ当支部会員の支部活動への参画意識の更なる高揚を図る参考にしたいと、主要各支部の活動状況、今後の抱負について聞いた。(挨拶部分割愛させていただいた。)

十年度版からの抽出で現在連絡をしていない会員数は冒頭記載のとおり)。対策としては、女性会員の参加会費を半額にしているが、その効果はまだ未だの域。また未加入会員の多い職場へ事務局の訪問を試みたが、まだ効果は少ない。この際次のような

対策の推進を計画している。(1)名簿作成 (2)敦賀以南(嶺南地区)の組織化 (3)敦賀市において全県地区の大会開催 (4)女性会員の大会開催 (5)若手会員の大会開催

「わが支部の特徴」設立は戦後の昭和二十八年で、初代支部長は岡田剛、続いて伊藤賢二郎、日下部三郎、増沢敏雄氏を経て、現在の堀川馨氏がここ二十年あまり再選重任を続け今日に至っている。特徴としては、会長と事務局との名コンビおよび幹事長、副幹事長ならびに熱心な役員

の強力な体制が誇りと言えらる。 「過去の思い出行事と最近の特記ニュース」(1)旧母校教授経済学博士・菅野和太郎氏、現職通産大臣として来福、懇談会(2)母校訪問 (3)会長宅庭園でバレーキュー大会 (4)会員の県議

立候補とその応援 (5)宇野宗佑通産大臣との大宴会(宇野さん

が黒田節の熱演を披露) (6)堀川会長を団長にしての香港・中国研修旅行(併せて会長経営の中国めがね工場の見学) (7)清水学部長、成瀬学部長の招聘 (8)吉田、岡田両理事長の招聘 (9)樋口名誉理事長の堀川会長の会社来訪と懇談。

○名古屋陵水会の現況と抱負

名古屋支部長

吉田宜正(大8回)

名古屋支部の会員数は現在約二千五百人です。しかし支部の活動に理解のある人は四百人弱、年一回の総会出席者は二百人、ゴルフコンペへの参加者は五、六組と言ったところです。

今回ご紹介するキーワードは「熱意」です。先ず、陵水亭を毎月開催しています。陵水亭は、他の支部でも開催されていますが、有志の飲み会で、岡田前支部長(現理事長)が始められ、現在も毎月続いています。毎回

十四、五人の出席者で賑やかに話し合いをしています。しかし若い人は関心がないのか、忙しかいのか、参加者が少なく、何世代に亘るこのような会の運営は大変難しいことを痛感しています。年十回開催していますが、

例え二、三人の時があっても続

けています。継続は力なりです。殆ど酒を飲まない倉坪幹事長の熱意の賜物と感謝しています。

もう一つ最近の活動は、浅井勢土さんの熱意で、混成合唱団スコラ・カントーラム・ナゴヤが結成され、演奏会も二回開催された事です。会員募集から合唱団を結成し演奏会にこぎつけたまで、大変ご苦労されました。浅井さんの熱意の勝利と言えます。年一回の総会くらい多くの

人に参加してほしいという思いから、毎年総会事務局の年次を繰り返して担当していただいています。本年は十五回卒と二十五回卒の方々にお骨折りをいただいています。そうするとその担当回生の参加率が高くなり、総会全体が盛り上がるきっかけとなります。

陵水会は会の性格上、自発的に熱心に取り組む方がいないと続きません。現役のビジネスマンは仕事に忙しく、現在は趣味も多様化していますのでやることも多く、陵水会への参加どころではないと考えている人は多いでしょう。また学生時代についての思い入れも人によって大きく異なると思います。会員参加の名案はないと思います。この会に意義があると思う人、参

加して楽しかった人が集まるよりしようがないですね。幸い名古屋支部では、吉田、榊原副会長、倉坪幹事長、五人の幹事の皆さんが熱心に陵水会を盛り上げています。また、岡田理事長さんもなにかにつけサポートしていただいています。このような熱意に支えられて名古屋支部が運営されていることをお知らせいたします。

○大阪陵水会の現況と抱負

大阪支部長

宮田清士(大2回)

当方の現況を概略、以下に報告させていただきます。

大阪陵水会の会員数は、平成十四年2月現在、千六百余名です。会合といたしましては、総会が年一回開催され、年間の会計報告、人事異動、行事活動状況、その他の事項についての報告をなし、懇親のためのセレモニーという形になっております。また別途、この総会の報告事項等について、事前審議をなし、且つ議決する機関として、大阪支部特有の「代議員会」――各年次代表・出席者約四十名前後――が年一回総会前に開催されております。一方、支部長以下三役を中心とする役員会――六、

七名――が年六回ほど、会食を共にし、行事の検討、各種意見交換などを行っております。本年度の総会は七月二十日(土)に大阪阪神ホテルにて開催の予定です。

行事といたしましては、ゴルフ会年四回、囲碁同好会年四回、その他機関紙「陵水おおさか」発行年一〜二回程度です。

以上、私どもの活動内容も、貴支部と大差ないところかと存じますが、ご参考までに特別に注力致しております点を申し上げますが、ご参考までに特別に

上げるとすれば、総会始め各行事には、出来るかぎりご妻女の同伴を勧め、漸次その萌しが見えはじめつつあることです。また行事として今後出来れば、希望者によるハイキングや小旅行も企画検討してはとの意見が出ております。新卒者については、一人でも多くの参加者を得たく本人直々、並びに各社の先輩諸氏に、支部総会を機に積極的な出席勧誘を願っているところで

特にながが母校も、二年後の国立大学独立行政法人化を控え、大きな転換期を迎えるなか、私共陵水会各支部も更に連絡を密にして対処の要あるかと存じます。

特にながが母校も、二年後の国立大学独立行政法人化を控え、大きな転換期を迎えるなか、私共陵水会各支部も更に連絡を密にして対処の要あるかと存じます。

「卒業論文を返却します」で六十六冊が返る

平成13年度の陵水会年報のなかで、母校の経済経営研究所からのお知らせとして、「同研究所に保管されている平成六年三月卒業以前の卒業論文を、希望者に返還する」とあった。返還実績は本年三月十九日現在、返還希望総数七十三冊(保管されているものを含む)、返還数六十六冊となっている。

返還された論文の内訳は次の通り。

卒業年度別…昭和二十七年年度一、同二十九年年度二、同三十年年度一、同三十一年度一、同三十二年年度一、同三十三年年度三、同三十四年度一、同三十七年度四、同三十八年度二、同三十九年度三、同四十年年度二、同四十二年年度十四、同四十三年度二、同四十四年度一、同四十五年度一、同四十六年度二、同四十七年度一、同五十二年度二、同五十四年度一、同五十五年一、同五十七年度四、同六十一年度一、同六十三年度三、平成一年度二。

ゼミナール別…山崎十四、石田九、山本七、松尾五、有田四、岡本、小倉各三、森(俊)、白杉、越後各二、進藤、有馬、大矢知、美崎、植木、梶田、大谷、河野、西川、村橋、門脇、片山、西藤、玉木、清水(厳)各一、ゼミ不明一。

昭和四十二年卒業の十四冊のうち、十三冊が山崎ゼミであるのが目立った。

経済経営研究所の話。「ゼミのお集まりで大学にいらした折に、返却を申し出てこられることがありました。皆さん、ご自分の卒業論文を手になされると、非常に懐かしいような、うれしようなお顔でページをめくられる様子を見て頂きました。」

なお、返却を申し出るには、卒業年度、ゼミナール名(指導教官名)、本人氏名を記入したメモと、本人の名前、住所を明記し、三百八十円の切手を貼付した返信用封筒(角二 33×24 cm)を、陵水会本部事務局あて送付すること。

こんにちは

凸版印刷株式会社

専務取締役

エレクトロニクス事業本部長

田川 行雄氏(大9回)

去る三月六日、東京駅徒歩二分のトッパン八重洲ビルに凸版印刷(株)エレクトロニクス事業本部長の田川専務を訪ねました。

〒一〇四一〇〇二八 東京都中央区八重洲二一七 トッパン八重洲ビル

Tel 03(3276)8001

Fax 03(3275)1475

E-mail: yukio.tagawa@toppan.co.jp

——こんにちは。お忙しいところをどうも。最初に、田川さんのご担当分野からお願いいたしますでしょうか。

(田川) 我々の会社は一九〇〇年(明治三十三年)の創業です。印刷会社ですが、事業内容にはいくつかの分野がありまして、大きく六事業部に分かれています。出版印刷分野、ポスター・カタログ印刷等の商業印刷分野、包装材料で身近なところでは食品の包装材料とか紙器によ

る充填システムを含むパッケージ分野、いちばん古いものでは有価証券関係の株券、小切手、約手、乗車券印刷等から始まって、ICカード、クレジットカードのいわゆるお金にからむ証券・カード分野に加え、家具や壁、床なんかに使う建築材を扱う産業資材分野、それに我々のエレクトロニクス分野に分かれています。

そうでしたように、二〇〇〇年度は何%伸ばしまして、オールトッパンの伸びの半分は我々の事業部で伸ばしました。——ところで、田川さんの、会社に入られた動機をお聞かせ下さい。



(田川) 私は営業向きでないと思っていました。当時のことで、ものづくりが産業の基本だから、メーカーに入りたい

んな電子部品を作るといっても大阪にあった工場が、手狭になりましたので滋賀に敷地を求めて移転したのです。初代の生産管理の課長は、数ヵ月で退職しましたから、私がお後釜に座ったのです。滋賀県に十年ぶりで戻ってまいりました。

——当時の凸版印刷の状況と、その後の経緯をお聞かせ下さい。

(田川) 五億円くらいの資本金だったと思います。大日本印刷とほぼ同じくらいでした。一九六一年(昭和三十六年)に入社、七〇年の暮れに課長代理になりました。それまでは商業印刷関係の生産管理をずっとやっておりました。七〇年の十月に滋賀県(八日市市)に工場ができました。フォトエッチング(photo etching)と、いわゆる化学的な金属加工をして、いろ

八日市に十六年

——当時の凸版印刷の状況と、その後の経緯をお聞かせ下さい。

(田川) 五億円くらいの資本金だったと思います。大日本印刷とほぼ同じくらいでした。一九六一年(昭和三十六年)に入社、七〇年の暮れに課長代理になりました。それまでは商業印刷関係の生産管理をずっとやっておりました。七〇年の十月に滋賀県(八日市市)に工場ができました。フォトエッチング(photo etching)と、いわゆる化学的な金属加工をして、いろ

んな電子部品を作るといっても大阪にあった工場が、手狭になりましたので滋賀に敷地を求めて移転したのです。初代の生産管理の課長は、数ヵ月で退職しましたから、私がお後釜に座ったのです。滋賀県に十年ぶりで戻ってまいりました。

そこに十六年間おりました。生産管理課長で行ったんですが、生産管理課長はたったの十ヵ月です。ちょうどそのころ、テレビの不買運動とかニクソンショックとか、当時も日本の電子産業は大苦戦の年でした。その時の八日市工場は製造百人、月商一億円目標、投資額十数億円、土地が一万坪の小さなものでした。それが、三千五百万しか仕事がなく、工場は建てたけれどいつこうに仕事が集まらないという状況でした。滋賀工場の生産管理課長は、腕の振るいようがない、こんなことやられてるか”と、いつてばやっておりますか”と、じゃー、君さ、売ってみるか”ということになって、私が営業をやったんです。

転動した年の暮れには営業課長です。それで十五年間、関西地区の営業です。それがピーク時は月商で五十億円くらいにな



凸版八重洲ビル

りましたか。我々のやっているエレクトロニクスの商品を関西のお客さんに売るといふ商売です。その間、部長から営業本部長になり、業績は比較的順調に伸びましたから、滋賀工場は健康的な体質になりました。

次いで、八七年に東京に転勤です。そこで営業本部長兼工場

長という立場で十五年ぶりに工場も見ることになりました。三年半後、当社はアメリカの会社を買収しましたが、「うまい」といかに、君行つてやつてこい」ということで、九〇年にカリフォルニアのサンディエゴに家族共々直接行くことになりました。二年半でいちおう恰好がついたものですから帰国し、九三

年四月に第一事業部長として関東地区全域を見ることとなりました。九五年に役員になり、事業部制の廃止に伴い全社の常務取締役営業担当副事業本部長に就きました。二〇〇〇年三月までです。その四月から当事業本部長となり、現在に至っています。

——話は戻りますが、滋賀県へ勤務されたのは、滋賀県出身だったからですか。

(田川) そういうわけではなかったですね。それは多分、たまにたまじやないかということでしょう。当時の工場長が、「奥さんも滋賀県出身だったよね」とよく調べておりましたが……。滋賀工場は八日市市が所有していた土地に誘致されていたよ

うなものです。仕事との関係を深めるために私が任命されたということは全くなかったですね。当時、初代工場長は、「新しくできた工場だが調子よくないし、声の大きい元気のいい君を選んだんだぞ」と冗談で言っていました。真偽はともかく、その工場長は、たまたま私が主任だったところの上司でした。

——ついでに、エレクトロニクスの商品はどんな製品を作っているんですか。

(田川) 滋賀工場ができたときは、お手元のカタログでいいですよ、各種のエッチングや、エレクトロフォォーミング(電気鑄造)技術を活用して作った製品

や半導体パッケージ製品の開発・製造ですね。金属の板を加工する方法はいろいろあるわけですが、例えば切削といって削るとかプレスでどーんと穴をあけるとかですね。我々のはフォ

トエッチングといって金属を腐食させ、不要なところを溶かす必要などところを残すという方法です。これの特徴は高価な金型がいらないとか、全く力を加えないで加工できるといった具合です。非常に硬くて薄い板を細かく加工するにはこれしかないといった、非常に小さな厚みが五〇ミクロン(一ミリの二〇分の一)のところ、六角形の網を作り、そこに電子線を飛ばして蛍光体を光らせるとい

う方式とかがあって、いろんな金属を化学的に加工する工場です。一九七〇年、大阪万博の年でした。そういうものからスタートして、いまはいろんなものを作っています。

eビジネスで発展

——御社の業界の位置付けとか、自慢話とかを。

(田川) 当社の自慢は、いまよく言われ出しているメセナとかの社会的に貢献する事業のことです。当エレクトロニクス事業部です(笑)。我々は印刷技術をベースにして発展していつ

て、将来を見据えると必ずどんなと変化していくだろうという捉え方をしていますから、エレクトロニクスに関係するところを伸ばしていくということに。情報の電子化ということに

なっています。eビジネスです。それから、先ほど触れましたエコロジー。これは世界の趨勢です。エコロジーには二つの方向があります、一つは環境にやさしい製品を作っていくということ、もう一つは環境管理の問題です。我々が力を入れているのに、例えば、具体的にいいますと、自動販売機にお金をいれますと、アルミか鉄の缶がころころと出てきますね、あれを紙でやっちゃおうということ

です。注意して見ていただいていますと結構始めています。当社独自のものとしては、ポツカコーポレーションさんとか伊藤園さんとかに採用していただいています。缶そのままの形でしている紙でできたもの、紙製品を使っています。環境にやさしい製品としてのものです。当然、リサイクルできますし、燃やしても有毒物質が出ないと

いうものですね。

また、お酒の紙の容器は、その八割くらいが当社製品ではないかと思えます。もう二十年近く前から使われていますが、これは充填システム込みで普及しています。酒屋さんにそのシステムを売り込むわけです。お酒は紙パックに入れて封をしなければなりませんね。その機械もセットで売るために、機械メーカーとタイアップしてお願いするわけです。そうするとずーっと紙の容器がってきます。現在はウーロン茶とかいろんな方面に伸びています。

の、もう十何年かかっています。ただし、ビールの発泡性のものなんかは膨張して、紙はそこまでの強度には耐えられませんかから無理なんです。お酒のよに浸透性のあるのは本当は難しいんですが、それは乗り切りました。八層くらいかみ合わせやってくるわけですね。

省資源ということも、またリユースということや、リサイクルということも、将来のビジネスチャンスになります。昨年か一昨年、当社は環境大賞というのをいただいています。いわゆる環境管理に関してですが、環境関係の費用を使ってどれだけ効果を出しましたか、それに對するレポートはしっかりとありますかとということに対してです。

中小の酒屋さん(蔵元)はたくさんありますが、紙パック化したいけれど大きなシステムが入れられませんから、当社が胴元になって、酒屋さんから資金を出資していただいて、当社がその充填システムの会社を作り、各々の酒屋さんがデザインしたその酒屋さん用の容器に充填していく仕事も当社がやっております。阪神淡路大震災の時、酒瓶は割れて大変だったんですね。すでにその当時、紙パックはありましたけれどですね。輸送も楽ですしね。

——そうするとプリントの分野からどんどん進化して別の分野へ発展しているということですか。(田川) 全く関係のないところへというのではなく、関連して拡がっていくということですね。お客様が共通だったり、技術が共通だったり、我々のエレクトロニクスでも全く違うことをやっているようですが、スタートはやっぱり印刷の版を作

るという技術から派生しているわけですね。ライバルの大日本印刷とはどうなのですか。(田川) マッチ・イーブンですね。各々、強いところと弱いところがありませんから、足してみたら変わらないというところでしょうか。この分野はどれだけ負けてるか、こちらはどれだけ勝っているか全て分析されていますが、両社とも連結でどちらも一兆三千数百億円です。この三月期はまだ終わっていませんから微妙なことはいえませんが、九月期に公表した数字では、連結売上でうちは三百億くらい少ないですが、営業利益で当社が発表したのが六百八十億、大日本さんは六百七十億です。一時期、新聞で凸版が大日本さんを連結で抜くというように報じられました。お互い独自に発表していますから、相手を意識して出したわけではありませんが、それくらい両社は競っています。



ですが、結果的には差がつきました。この業界は二強なんです。その代わり何万社とありますからね。この前、郵便局の数よりも多いと言っていましたからね。

ほんのわずかの成功例ですね(笑)。華々しいものはあまりないんですが、入社してからは長らく生産管理で、営業は特にやっておりますでした。私が関西で営業を始めたときは、凸版印刷の営業のやり方というものを誰にも教えられてない状態でしたから、自分なりに絵を画いて始めたわけです。凸版印刷の営業フォームはちゃんとあったんですが、私だけが工場出身ですから、関西支社にいた営業マンを工場の事務所に集めてスタートしたわけなんです。ですから私は、右見て左見て勉強するわけにはいかなかったんです。自分なりに勉強してやったわけです、それまで工場に十何年間おった経験と、いままでの工場での買う立場、つまりどういう売り方をしてもらったら買いたくなるかという、逆の立場で考えるとということが私の唯一の財産だったんです。そういうことを工夫しながらやったことを、お客さんが結構受け入れてくれましたから、マーケットシェアが伸びていきました。それと、東京に転勤してからは、なぜか悪い星の下に生まれましてですね、むちゃくちゃになったところを担当することが

編集部注・平成十三年三月期
本決算連結予想(日本経済新聞社三月十四日付)

今期売上高(億円)	凸版	一三、二〇〇
	大日印	一三、五〇〇
経常利益(百万円)	凸版	六九、〇〇〇
	大日印	六八、〇〇〇
税引き利益(百万円)	凸版	三一、〇〇〇
	大日印	二一、〇〇〇

お前、建直してこい
——成功談を一つ。

(田川) 数たくさんさんの失敗例と



印刷博物館 正面

るいやすかったですね。我々のよちよち歩きの時の上司が、我々にそれをやらせてくれたですね。上司に恵まれたこともあります。

——その他、まだいろいろお聞きしたいことがあります。いまは会社には陵水のメンバーは何人くらいいますか。

(田川) 多分、私だけだと思います。先輩は二人おられました。同期も定年退職しました。私の次の年次で二人入っていました。一人は中途退職し、一人は勤め上げたと思います。その次の年次で、当時の工場長にひどく文句言われたんですが、当社に受かった者が大日本へ行っちゃったというので、絶対、君とこからは採らんということになったんです。事実、それで降来ていません。大日本とはライバル同士ですからね。

——忘れない前にお聞きします。ゴールドの「葉」を作っておられますが。

(田川) あれは、昭和五十七年だったか、テレビのシャドウマスクを作る工場を建てたときの記念品として引出物に使いました。ちょうどそのころ、DDH



印刷博物館

(田川) そうです。一昨年、創業百周年の記念の気持ちもこめてオープンしたものです。日本で初めての本格的な印刷博物館と、優れた音響性能のコンサ

多かったですね。あかんでどうしようもないところへ、お前担当だ、いけ」という具合にです。だいたい業績が悪いというのは仕事が足らんから悪いということが多いわけです。事実、それで悪くなっているんです。ところがラッキーだったのは、私のせいじゃなくて私が担当する直前くらいから、だいたい市場が良くなっていったんです(笑)。言われたときにはエライところへと思ったけれど、行ってみると良くなってきているんです。それで、仕事をいかに集めるかなさかということだ、いかにこなすかということだったんです。仕事さえあれば、問題点を一つひとつまじめに解決していけば、必ず良くなるんですよ。仕事がないと操業度が落ちますから当然コストは高くなります。無理するから余計悪くなるんです。逆に仕事があれば値段も下がらないし、忙しいのはうちだけでなくて皆忙しいんですよ。世の中良くなっているのと周囲も良くなっている、悪い部門が比較的うまくいくようになったというケースが二、三回ありました。

——会社として、滋賀工場に営業を集めるということを受け入

れてくれた土壌があったわけですか。

通すということ。潰しにかからぬということ。力を振

り出すということ。潰しにかからぬということ。力を振

河西回廊・西域旅情

清水 源一郎 (本15回)

この手記は紀行文と云うより、行った旅先についての雑記帳である。旅行後に手許に集まった資料・調べたことなどを織り込んで、纏め上げた。一九八六年(昭和六一年)三月十一日～三月三十一日(二〇日間)、大陸との往復は「鑑真号」(片道四八時間の船便)、上海・北京・西安観光の上、河西回廊・西域を回った。この手記は旅の後半部分に当たる。

第一章 河西回廊

◇ゴビを走る

一九八六年三月十八日、西安を夜行列車で出発、翌朝蘭州を通過する。黄河の鉄橋を渡り更に西へ進む。これから先は「河西回廊」と呼ばれ、南に祁連山脈が東西に連なり、昔から西域との重要な通商路…糸綯之路(シルクロード)の走る地域である。この要地を確保するため、万里の長城が延々と道路を守って西に延びている。車窓からの風景は既に「ゴビ」と云う砂漠地帯に変わり、時折停車する駅

はオアシスの町である。祁連山脈の雪解け水が地下水脈を流れ、或いは地表を流れて、オアシスを潤すのである。列車は一日中走り続け、夜を迎え翌三月二十日早朝酒泉に到着、ここで下車する。実に西安から車中二泊(約一千三百キロ)の旅であった。酒泉の接待所で朝食、まず案内されたのは公園。その一郭に、石で囲まれた方形の湧きだし口があり、滾々と清冽な泉が湧き出している。泉の向こうに美しい池が水を湛えていた。

『酒泉』と云う地名の由来として次のようなエピソードが伝承されている。漢の李広將軍がこの地に来たとき、土地の父老が酒を献上した。將軍は「自分一人で飲むわけにはいかん。さりとて数千の部下將兵に行き渡るには、量が足りない」として、泉に酒を注いで全軍に行き渡らせたと。その思いやりを地名として残り、將軍を讃えたという。この將軍は勇將 霍去病であったという説もあり、定かではない。なお、ここで交通機関について一言。蘭州以西の鉄道は解放後の一九六二年の建設で、蘭新鉄道といひ新疆地方へ達している。一九九五年には蘭新鉄道の武威ウラムチ間の複線化が完成したという。また、舗装自動車道路も蘭州を中心に放射状に発達して、他省の主要都市に通じている。さらに、蘭州から北京、上海、ウラムチその他の国内主要都市や酒泉、敦煌などの省内の都市への航空路も整備されている。

次いで夜光杯の工場(甘肅省酒泉工芸美術廠)を參觀する。祁連山の山から産出される玉石を磨き加工するこじんまりとした作業所である。暗緑色の縞模様と透明な材質の入り混じった夜光杯、その実物を手にとつて眺めたとき、学生時代木村善堯先生の「葡萄の美酒 夜光の杯 飲まんと欲して琵琶馬上に催す」と名調子の唐詩選の講義が脳裏に甦り、詩の全文がすらすらと出てきた。ツアーに参加している女子学生に、私はこの詩を詠じ、その意を語り伝えた。作家陳舜臣さんはこの詩について、著書『敦煌の旅』の中で「王翰はこの一編しか残していない無名の人だが、この詩が愛唱されるのは、やはり結びの句

古来征戦幾人か帰る が人の心を打つからだ。始まりの句 葡萄の美酒も当時とはエキゾチック、そして夜光の杯―いかに妖しい光を放っている」と結んでいる。葡萄と言ふ言葉はペルシヤ語でブドウ酒を意味するバーダに由来すると云われている。

◇嘉峪関

酒泉の觀光を終わり、マイクロバスで敦煌に向かう。途中、近郊三十数キロ西に嘉峪関があり、立ち寄る。一三七二年の明代に築造された。万里の長城の西端の砦で、二重の城壁に囲まれ、城門の上には三層の高雅な樓閣が二棟相對する形で、砂漠の空に向かつて聳えている。城壁の上から遙かにひろがるゴビを見渡し逍遙することしばし。まさに「天下の雄関」の名に相應しい威容である。城壁に接する万里の長城は土塁であるが、横たわる龍のように荒涼たるゴビの彼方に延々とうねりくねって消えてゆく。ここに國境守備隊が派遣され、西からの異民族の進入を防ぐ防衛拠点形成

し、國境を出入りする旅人を改める関所でもあった。今は保存改修され、觀光資源としての役割を果たしている。城の東南には泉が湧き、城兵の命を支えていたと思われる。一八四二年九月七日(今から一五五年前)、林則徐は嘉峪関近くの駅舎に泊まり、翌日関城を通過し、遙か西の流刑地に向かった。

新疆の西北端ロシアとの國境イリに到達、周辺各地の水利、建設、屯田など民生の事業を興し、イリには今も「林公渠」と呼ばれる水路が残っている。東は黄海を臨める山海関を起点とし嘉峪関に終わる現存の長



城は明代、とくにその後半期に築造されたもので、東の山海関から、中国本土の北辺を西に向かい、北京と大同の北方を経て、南流する黄河を越え、陝西省の北端を南西に抜けて再び黄河を渡り、いわゆる河西回廊（シルクロード）の北側を北西に走って嘉峪関に至る。地図上の総延長約二七〇〇km、あるいはそれ以上といわれ、人類史上最大の建造物とされている。

明は建国の当初五〇年は対外的に積極策をとった。水楽帝はその在任中、五回に亘り自ら大軍を率いて蒙古の奥深く攻め入った。一方、部下の鄭和に六十隻余の大船団を率いて遠くインド洋アラブ諸国を訪問させた。この航海は二十八年間、七回に及んだ。だが、この様な対外積極策は次の時代になると一転して専守防衛に転じ、長城の線まで兵を引いた。明は長城の修築整備を行った結果、現存の姿として残っているものである。但し、修築後も度々異民族は易々これを取り越え進入している。こうして、明朝は酒泉（肅州）の西にある嘉峪関を西の国境の関門として、かつての玉門関の役割を果たさせていたが、トルファンへの侵入が相次いだため、

一五二四年（嘉靖三）に嘉峪関を閉鎖して東西交通を遮断し、敦煌を放棄してしまった。中国本土が強大なときは西域まで勢力を及ぼし、衰退すると異民族が力を揮い、この地を席卷し、東の中国本土に雪崩れ込んだ。正に民族興亡の十字路であった。

共産党の天下になって、中国は本土を固め、やがて人民解放軍を送り込み、鉄道を西に延ばし新疆ウイグル自治区を貫き、ソ連国境に到達、更に砂漠の奥深く迄建設を進めている。道路・電話も同じである。石油、塩田、電力、灌漑、緑化、工業の振興等々、進展目覚ましいものがある。TVも可成りの速度で普及している。砂漠の道路はアスファルトで舗装されて、車は快適に走る。車内では喜多郎のシルクロードのテーマミュージックが流され、日本からの遠来の旅人への暖かい心遣いと受けとった。やがて安西の街にはいる。道の傍らに数頭の駱駝が繋がれているのが目に入った。この地へ来て始めて見る光景である。駱駝は

せない交通手段である。駱駝と街に別れを告げ、車は更にゴビの単調な荒野を走る。遙か左手方向には雪を頂いた祁連山の並みが見られる。この辺り鬢気が楼も見られるようだが残念ながらお目にかからなかった。また、砂嵐もなかった。道路に平行して、電柱や電線が走っている。電話が敷設されているのだ。電話に混じって所々に「日干煉瓦」を積み上げ半ば崩れかけた構築物が目に入る。「あれは烽火台だ」と教わる。外敵が進入したとか異変が発生したとき、狼煙を上げて都に急報した。古代の通信施設である。古代と現代の通信網が仲良く肩を並べている

様子が見えない。電話はダイヤル即時通話ではないので、遠隔地に電話をかける何時間も待たされる。それがこの時から十年後の現在（一九九五年）では、日本への国際電話でもダイヤル即時に繋がっている。都市の若者は携帯電話、場所によってはテレホンカードも使用可能である。中国の電話事情もまさに隔世の感がある。

ナである。ここは西域北路及び南路の出発基地、西域との交易で栄えた街である。平屋建てのホテルに投宿する。この日私も、マイクロバスでゴビを走りつづけ、積中ついに一軒の人家も見なかった。まさに、平沙万里 人煙を絶つを実感した。

◇河西回廊
中国では河西走廊と呼んでいる。河は黄河、その西の廊下のような交通路という意味。南に万年雪や氷河を戴く東西八百キロにわたって走る祁連山脈、北部にトンクリ砂漠やパンタンギリ砂漠、それに小高い龍首山に挟まれた長い帯状の地帯である。南に横たわる海拔四、五千メートル級の祁連山脈は三千本の氷河があり、巨大な「凍れるダム」を形成している。この雪解け水の恵みにより、回廊には豊かなオアシスが点在し、河西回廊が東西文明を結ぶシルクロードとなった。

率いて出撃、匈奴を討ち、回廊から追放して武威（涼州）、張掖（甘州）、酒泉（肅州）、敦煌（沙州）の直轄四郡を置いた。現在の行政区画の『甘肅省』は甘州、肅州をちじめたものである。また、省境の名山「隴山」より、この地域の略称を『隴』と呼んでいる。

回廊を東から西へ向かう道路シルクロードは絹の道であり、印度仏教渡来の路でもあったが、中国本土の王朝が勢い盛んな時代、この街道は軍用公路と化し、西域を支配下に置いた。国力の衰退が始まると、多くの異民族が回廊を支配し中原を目指した。最初に大軍を發したのは漢。また、唐の時代はその国力最も充実し、回廊を通じて西域を制圧し、交易が興り、都長安は国際都市として空前の繁栄を誇った。回廊を通じて、軍隊や行政府が西に送られ、唐の詩人の中にも役人として西の各地に赴任した者も居た。或いは回廊からもたらされる西の情報を得て、本国の詩人達は西域の風物・戦争を題材にして、数多くの詩を残している。先に掲げた「葡萄酒 夜光の杯」は涼州詞と題する詩であるが、ここで涼州とは「武威」だけでは

く、広く河西回廊で歌われている民謡の曲に合わせて作られた詩である。他にも多数の涼州詞がある。また、「塞下曲」や「従軍行」と題する詩も西の戦場を詠じたものである。

第二章 砂漠の大画廊 敦煌

ゴビを走りつづけたマイクロバスはオアシスの町敦煌に辿り着く。酒泉からの走行距離約四百キロ、一日がかりの旅である。夕方近く町に入って先ず目に入ったのはTV放送局、辺境の地であっても大都市の体裁は整っていた。平屋建ての敦煌賓館に投宿する。清潔な部屋に案内され、熱いお茶は砂漠を走った渴きを癒してくれる。

翌三月二十一日は莫高窟の見学。町を出て整備の行き届いた灌漑用水路を越えると、もうゴビの荒野である。二十五キロ先に莫高窟は姿を見せた。鳴砂山の崖に沿って車は走り、石窟を造営した工人や修行僧の居住した窟が見えてくる。やがて小さなオアシスで、敦煌文物研究所のほかには建物はない。郭沫若の筆になる「莫高窟」と書かれた扁額が掲げられた牌楼の立派な門を入ると、木立があり、小

川が流れている。正面に大仏殿の楼閣が崖に密着して聳え、石窟は三層乃至四層に亘って配列、全長一・六キロの間に掘られており、総数は四百九十二窟あるという。各窟には木製の扉が取り付けられ、嚴重に施錠されている。崖の前面に足場を組んだような通路が設けられ、崖の上は鳴砂山で、文字通り細砂



敦煌の飛天の像 (筆者撮影)

のか?」と云う素朴な疑問が湧く。西北インドからアフガニスタン・パキスタン地方に伝搬された佛教は、新疆の最西端カシユガルを経由してシルクロード西域北道及び南道に点在するオアシスの町々に仏教遺跡を残しながら東に伝わって行く。敦煌の千佛洞はその中でも群を抜く規模であり、造営の歲月におい

時代の変遷が、内部の様式を様々に変化させる。その上、これは東西文化の交流点である。実際の見学は文物研究所の職員が案内に立ち、窟の鍵を開け暗い窟内を懐中電気で照らし出し、塑像や壁画の説明をしていく。二ヶ所ばかり見て回り、木造の大仏殿に入り、梯子のような階段を上下して大仏を拝観した。これで見学を終わる。何だか鰻屋の前を匂いだけ嗅いで素通りしたようなものであった。もともと、こちらにはその鰻の善し悪しを見分ける審美眼も持つてはいないのだから仕方がない。世界最高の文化遺産だといふのに、悲しいかなまさに猫に小判である。ここに収蔵されている文物は世界第一級の芸術品であり、解放後の中国では重要な国宝文化財と指定している。一九八七年ユネスコは莫高窟を「世界の文化遺産」に指定した。

見学を終わって率直な感想は、砂漠の大画廊「敦煌・莫高窟」の芸術を云々することは出来ないが、私の敦煌の旅は見学を契機として始まったと云っても過言ではない。ホテルに帰って、売店で「敦煌飛天」の大幅集を購入し、この重い荷物を抱えて帰国した。家に戻って画集を開いてみると、常書鴻夫妻の懇切丁寧な解説が付いていた。画集や敦煌関係図書を渉猟し、「誰が、何のために築造したのか」と云う疑問が次第に解けてきた。この砂漠のオアシスの住人は未開野蛮の人ではなく、島国の日本より遙かに早く東の中国西のベルシャヤインドの文化に接していた。仏教はこのシルクロードを通じて東漸し、石窟に仏像を彫り、巡礼する風習も一緒に伝来した。一人の信仰の深い仏教徒の掘削をきっかけとし、有力なスポンサーが仏師・画工・工人を集め国や一族の安泰の祈りをこめ、或いは来世への極楽往生を願ってと、色々々な動機があったと思われる。日本の貴族や大名が菩提寺を建てたのと同様である。有力者は窟の中に名を刻みつけている。また、工人達の住んだ洞窟群も残っている。

なお、ここで交通機関について一言。蘭州以西の鉄道は解放後の一九六二年の建設で、蘭新鉄道といふ新彊地方へ達している。一九九五年には蘭新鉄道の武威ウラム子間の複線化が完成した。先生夫妻は四十年に亘り、荒廃した石窟・流砂に埋も

れた石窟を復元し、保存・修復・模写に生涯を捧げられた。敦煌の今日あるのは、先生の努力のお陰と云っても過言ではない。敦煌文物研究所長を辞してからは北京に住まい、日本でも井上靖・東山魁夷・平山郁夫・陳舜臣・司馬遼太郎の諸先生と親交があった。常先生と夫人の李承仙さんは二人とも画家で、一九九八年四月、奈良法隆寺の本坊・使者の間の襖絵を完成させている。その絵は敦煌莫高窟から舞い上がった天女（飛天）と法隆寺から舞い上がった天女が、天空高く舞い遊び、日中の友好和楽を詠い上げている。中国の天女も日本の天女もそのルーツを辿ればシルクロード経由であって、出身は同じである。この襖絵の経緯は着手・制作過程・完成・落慶式の様子まで録画され、昭和六三年四月一日NHKスペシャル番組「シルクロードから来た天女 開眼・法隆寺西園院ふすま絵」として放映された。

◇月牙泉（三月二十二日）

砂漠の空は澄み切って、深く青い。その空の色を映した水をたたえる神秘の池泉、それが月牙泉である。月牙泉は鳴砂山砂

丘の中にひっそりと佇んでいる。そこへ行くには鳴砂山の砂漠を歩くか、客待ちの駱駝の背に揺られて行くしかない。私達は徒歩を選んだ。鳴砂山は字の通り、踏めばキュッと鳴くような音を立てる粒子の細かい鳴き砂の丘である。これを越せば目指す泉が見えるはず。ところが砂が靴の中に入りこんで、何も歩きにくい。頂上まで登るとは諦め、中腹を歩いてやっとの思いで池畔に辿り着いた。池畔に立って見渡すと、かつて見たこともない仙界の景色。青く澄み渡った空が水面を染め上げ、周囲の砂丘が影を落とし、声をのむ美しさ。泉は三日月の形をしているので、月牙泉と名付けられている。この泉、四面砂丘に取り囲まれ、何処にも水の出入り口はない。とすれば泉の底から湧き出る水と蒸発し地中に浸透する水量とが微妙なバランスを保っていることになる。一九八八年（昭和六三年）上映された映画『敦煌』のラストシーンには、漢人の敦煌の太守が集めた貴重な文物を敦煌城が異民族西夏軍の攻撃によって落城したとき、若い学徒の主人公が文物を護り、莫高窟の一室に運び込み土壁を塗り込んで秘

匿、更に追われ傷つき、月牙泉の畔に辿り着いて息絶えるというストーリーである。月牙泉でラストシーンは感動的であった。井上靖さんの小説「敦煌」の映画化で、撮影は現地に大規模な敦煌城のセットを組んで行われ、異民族の傭兵隊長で乱戦の中悲壮な最期を遂げる、俳優西田敏行の好演も光っていた。時代は宋、西夏が敦煌を攻略したのは一〇三六年であった。井上さんは後世石窟から大量の敦煌文書が発見されたことをテーマとして、傑作「敦煌」を構想・執筆されたのである。

◇陽関

陽関は敦煌西南七〇キロ、今は関所の跡はなく、小さなオアシスがあった。傍らの小高い丘に案内される。そこにはかなり大きな烽火台が崩れかけた姿を灼熱の太陽に曝していた。見渡す限り荒涼たるゴビ、

「渭城の朝雨 軽塵を浥す
客舍青青柳色新たなり
君に勸む
更に尽くせ一杯の酒
西の方陽関を出ずれば
故人無からん」

と詠んだ詩人王維の思いを実感する。任を帯びて都長安より

遙か彼方西域に旅立つ友人を、近郊の渭水の畔まで見送り、門出の饞に贈った詩である。『元二の安西に使用するを送る』とのタイトルがついている。友人の任地は二千キロも西のトルファン安西都護府、そこへは馬や駱駝を乗り継いで行くしかない。この詩を、私達は送別会の時、友人のため朗々と吟詠する。その友人は新幹線や飛行機で任地に赴く。今生の別れとなるかも知れない往時の離別は、水杯の悲壮感があり、陽関に立って始めて知る詩の重みである。

陽関の北に玉門関がある。玉門関には行かなかったが、土を固めた砦の原型が残っているようである。その名は、西域からの玉石の入口を意味し、西域北道の関門であり、陽関は玉門関の陽に位置し西域南道の関門である。だが二関の名を並べてみると、奇妙なことに気がつく。玉門は女陰、陽は陽物即ち男性そのものである。昔の人は砂漠

のど真ん中に勤務して、こんな名前をつけて寂しさをまぎらわしていたのだろうか。玉は漢民族にとつて貴金属の金以上の価値あるものであった。「玉」という語は最高のものを意味する形容詞として使われていた。玉座、玉音など、これは玉を最高と考えているからに他ならない。その玉は紀元前から西域・ホータンの白玉河や黒玉河の河原で採取され、原石のまま玉門関を通って、中国に運ばれ研磨加工された。原石はもともと崑崙山脈に産するが、それが雪解け水に流されホータンに達しているのである。

（了）

三月二十三日朝、自由行動でホテル付近を散策する。前の道路を町の中へ歩くと、やがて大きい交差点にさしかかり、そのロータリーに『飛天』の立像が迎えてくれた。早速カメラに収める。私の愛蔵する写真の一枚である。それより敦煌でのスケジュールを終わり、マイクローパスは再びゴビの道进行、蘭新鉄道の町「柳園」に向かった。数時間走り、柳園駅に到着。寝台車に乗りこみ、いよいよ『西域』の町トルファンに向かう。

当紀行文は、執筆者が訪ねた史蹟遺跡にまつわる名詩名文とその解説が記載され、充実した内容となっていますが、紙面構成の都合上、これら詩文の多くと関係図数枚を割愛させていただきました。（編集部）



第四十八回東京陵水ゴルフ会
 平成13年12月4日(火)
 金乃台カントリーC

久々の雨天スタート

平成二年三月に始めて以来、年四回、九十二年の四十八回、四、六、九、十二月と欠かさず継続。うち一日中雨のプレーは零。雨のスタートが僅かに過去二回のみ(第三十一回伊勢原、第三十三回金乃台)。今回が三回目の雨天となったが、やはり6〜7ホールで傘いらず。午後

は青空も見え、お天気が水の面目を何とか保った。しかしスコアには影響か。珍しく4オーバーで小口さんが第三十七回以来の二回目の優勝。三十二名の参加申込みが、結果は二十八名と最近ではやや少なめ。四十一回の四月には三十九名の参加あり。

東京陵水会囲碁会便り

十二月八日(土)市ヶ谷の日本棋院に於いて今年三回目の囲碁会を開催したところ、二十三名のご参加をいただき盛大に終了する事が出来ました。

対局後、午後六時ごろより一階の「遊仙」において、成績発表を兼ね忘年会を行い、九時ごろまで囲碁談義で盛り上がりました。

特記すべきは佐野志郎会長の勲五等瑞宝章ご受賞のお祝いと、優勝された水引芳雄六段が囲碁は七十歳代でも勉強し気力が充実すれば、上達することが出来ることを証明してくれた事だと思えます。

記 録
 優勝 小口 晃(大14) ネット
 二位 柴田茂夫(大2) 69(15)
 三位 碓井富夫(大6) 73(14)

四位	池田辰彦(大8)	73(28)
五位	北村 徹(大14)	73(16)
七位	井口博民(本22)	74(16)
十位	吉村 恒(大3)	74(8)
15位	吉原悟一(大9)	76(18)
BB	橋本 侃(本22)	77(30)
ベスグロ	碓井 85	
ニヤピン	蓑島(大4)、白井(大14)、碓井、池田、西沢(本24)	
大波、吉原、小波、中辻(本21)		

(参加者二十八名) (著方 記)

計 報

北村 茂男氏 (本10回)

元オリンパス光学 工業株式会社社長

三月十一日肺炎で逝去。葬儀が去る三月十五日、中野区宝仙寺で執行された。同氏は昭和十三年三月彦根高商を卒業、昭和二十六年九月にオリンパス光学工業株式会社に入社、以降各部門の部長、取締役、常務、専務と栄進され、昭和四十八年から同五十九年の間同社社長に就任、同社の発展とカメラ業界に大きく貢献された。以後、会長ついで昭和六十三年から逝去されるまで最高顧問を勤められた。このたび本紙編集部から同社広報部に生前を偲ばせて戴く資料をお願いしたところ、葬儀当

日、霊前に捧げられた同社の取締役最高顧問下山敏郎氏の弔辞のご提供をいただいた。同社のご好意にお礼申し上げここに掲載する。

弔 辞

謹んで故最高顧問、北村茂男さんのご霊前にお別れの言葉を申し上げます。北村さんとのような方たちでお別れしなければならぬとは、つい十日ほど前まで夢にも思わぬことでした。生者必滅、会者定離とは平家物語の中に出てくる仏教語でありすが、この世は無常で会う者は必ず別れる運命にあるということでありませう。ここに北村さんとの一期一会に想いを巡らせながら弔意をのべたいと思いません。

北村さんが昨年暮れに広尾の日赤医療センターに入院されたと伺いましたが、この頃はまだお元気でありました。一月にお見舞いに伺ったおりも「下山君、こうしていると無性に人こいしくなるよ」とおっしゃっていましたが、今日あることを無意識のうちにご存知されたのかと今では思っております。その後、酸素吸入をされるようになり、苦し

息のなかで「昨日は孫たちが嵐の如く来て嵐の如く帰ったよ」と北村さん独特のユーモアのある表現で語られ、嬉しそうにしていらっしゃいました。

北村さんはまた「米寿までは生きたいよ。二月十一日が誕生日だから」とおっしゃっていましたので、私はまさか十日ばかり後のことではなく、来年のことを話しているものと勘違いしてしまい「来年までには必ず元氣になりますよ」と申し上げた次第でした。米寿を病床でお迎えに思っておいでのことと思います。

訃報を受けたのは香港出張の折りで国境を越えて深せん地区に出発する直前でありまして、ただただ残念、無念の極みでございます。奥様はじめ、ご遺族の深い悲しみは如何ばかりかとお察し申し上げます。

北村さんは一九一五年、当時は紀元節のおめでたい日の二月十一日に滋賀県でお生まれになりました。近江の国のご出身を大変誇りに思っておいでになり、雪深い越後の生まれの私にはいつも「あそこは化外の地と言うんだよ」とからかっておい

ンパスに入社したのは一九五七年十月で、直ぐに経理部長に就任になり、海外部長、営業部長、専務を経て一九七三年、代表取締役社長にご就任になりました。

北村さんのご入社の際のオリンパスは、戦争が終わってまだ十年過ぎた頃で、「もの作り」も未分化の状態でありました。端的に申せば戦後の日本の復興期の来る前の泥臭い会社であったと思います。北村さんはご専門の財務、経理から手をつけられて、国内営業・海外営業・管理部門と風土を改革なされ、オリンパスの現在の近代的経営の基礎を作られた方であります。一九八二年の当社の一四期には最高の経常利益一四四億円を計上、これは長い間当社としては破ることが出来ませんでした。

もう一つ忘れてならないのはオリンパスは現在、ハイテク精密企業の一つとして、世間から評価されておりますが、この基礎を作られたのは北村さんでありました。当時はまだハイテクという言葉すらありませんでしたが、北村さんは社内では有名な「砂場論」ということを強調されておられました。「砂場論」というのは優秀な技術者に、あ

たかも子供が砂場で自由に遊ぶように、自由な発想で研究、開発をやらせるのだということでした。私事になりますが、私も北村さんのご意志を継ぎまして、八王子・宇津木台に大きな砂場とも言うべき中央研究所を作り「知的に自由な雰囲気の中で、知的に厳しいマネージメントをやって欲しい」と要望して来たものであります。この北村さんのご意志は歴代社長によって引き継がれて現在に至っているものであります。

海外部門の長かつた私は北村さんの下で四十年近く上司としてご指導いただきて来ました。忘れることの出来ないのは米国カメラの販売代理店ポスター・アンド・ベスト社との契約解除の問題でありました。ご著書である「オリンパスと共に、半生断片雑記」の中にも書かれておりますが、オリンパスとしてはどうしても米国市場でいつまでも代理店を通しての販売ではなくて、メーカーとして独立してアメリカ市場に直販をやりたいとの強い意向がありました。北村さんは当時輸出部門を離れて村さんは当時輸出部門を離れていたのですが、ポスター・アンド・ベスト社のカツ社長とは

必ず無条件で大政奉還すると約束を行いました。カツ社長はアメリカのカメラ業界ではインテリであり言行一致の人でありました。私も最後の一年間はアメリカに張りついて引き継ぎの交渉をしましたが、カツ氏は約束どおり極めてフェアで、立派に仕事を引き継ぐことが出来たのは、ひとえに北村さんとカツ社長との信頼関係にあり、日本カメラの米国市場進出の歴史に残る成功であったと思っております。当時アメリカの有名な業界紙、モダン・フォトグラフィの記者、ハーバード・ケプラー氏が「ロミオとジュリエットの涙の別れ」と大きく報道してくれたことは今でも忘れることが出来ません。

北村さんの思い出はつきません。北村さんのご意志は会社のなかで脈々と息づいております。また、遺されたご家族は皆様ご立派であって、奥様は絵を描かれることは素人の域を脱して、二科展に入選されたり、芸術雑誌を飾られたりしておいでです。ご息もオランダ銀行の要職にあつてヨーロッパで活躍になっており、お嬢様も母上をよく助けておいでになり、

羨ましいくらいのご家族でございます。何卒今までどおり慈愛の眼を以て天上からお守りください。年々歳々花はうつろい、歳々年々人はまた同じからず、が世の常とはいいながらいつの時代でも別れることは辛いものでございます。北村さん、いまや貴方の魂魄はあの誇りにしていた懐かしい滋賀の山野に帰り、近江の湖の夕波千鳥の鳴き声に耳を傾けて安らいでいることと思ひます。

愈々お別れです。どうか安らかに眠り下さい。合掌
平成十四年三月十五日
オリンパス光学工業株式会社
取締役最高顧問 下山敏郎

「印刷博物館」
〒一三二一八三五
東京都文京区水道一三三
Tel 03(5840)2300
http://www.printing-museum.org/
「凸版印刷の進化論」(巨情報コミュニケーション産業の誕生) 徳丸壮也著 出版文化社発行
平成十三年十二月
税別 千五百円



(P8からのつづき)
「トートホール」トッパンホールを開館しました。皇族の方々もお見えになったりして、評判がよろしいんです。日本にはあそこしかありませんし、一階が音楽ホール、二階がレストラン、地階にその博物館があります。二十一世紀の記念ビルとしての横に二十一階建てビルがあります。二階建ての低層階ビルは一般公開していますが、二十一階ビルは営業ビルです。

今日、昨日の暮れ、出版文化社から徳丸壮也氏による「凸版印刷の進化論」が出版されておりますので、ご参考にして下さい。

「印刷博物館」
〒一三二一八三五
東京都文京区水道一三三
Tel 03(5840)2300
http://www.printing-museum.org/
「凸版印刷の進化論」(巨情報コミュニケーション産業の誕生) 徳丸壮也著 出版文化社発行
平成十三年十二月
税別 千五百円

彦根コンフィデーション

——滋大陵水新聞会

三月を迎え、早くも新しい春がやって来ました。滋賀大生にとって心機一転、新たなスタートを切る時期であるとともに、新たな仲間「新入生」を迎える時期でもあります。入試も終わり、学内の各団体の勧誘活動も本番を迎えている滋賀大学から、一番フレッシュな近況報告を陵水会の皆様にお届けします。

(1)新しいスタートの前に

三月を迎えても、他の地域に比べ彦根では若干寒さが残りまゝです。今年例年と比べて暖かいということ、桜が見られるのも早いのではないかと言われていますが、三月の前半はまだそのような気配は感じられませんが、こんな時期には外へ出るのも億劫になりそうですが、既に多くの学生が元気な姿を学園にみせておられます。

三月の上旬と下旬の二回行われる新入生の入学手続きは、各団体・クラブ・サークルにとって恰好の新会員勧誘活動の場となっています。三月十一日の前期入学手続き当日は少し肌寒い状態ながらも天候に恵まれ、学園内は終日、手続きにやってくる新入生を取り囲んで、ピラを配ったり、勧誘の話掛けをした

りする光景が繰り広げられていました。

新入生にとっては少しばかり手荒な「滋賀大学の洗礼」も見られましたが、やはりこのような時こそ、大学が小さい良さと学生の闊達さ、親密度の深さというものをしみじみと感じます。そうしてそれぞれの団体・クラブ・サークルに参加した新しい仲間が、この良さをまた次へと引き継いでゆく・・・、おそらく、ながい伝統に沿って変わらない姿がここにあるのだと思います。

さて、「新緑祭(開学祭)」をご存知でしょうか。毎年五月初めの開学記念日に併せて行われている、学内総出のイベントです。多くの模擬店が出され、展示会も賑やかに、さながら学園祭の様を呈しますが、今年から名称を「春風祭」に改め、四月の上旬(今年は四月二十日)に開催されることになりました。リニューアルということ、これまでよりも規模が大きくなり模擬店・展示会なども大幅に拡張されるとのこと。新たなイベントの登場が学内を湧かせています。

(2)独立行政法人化をめぐる国立大学の独立行政法人化がいよいよ具体化し、現実のものとなりつつあります。本学におけるこれへの対応として、滋賀

医科大学との統合という新たな転機に踏み出すことになりました。昨年十一月には宮本憲一学長を交えて、統合問題に関する全学フォーラムが開催されています。そこで出された教養過程の統合(一・二回生の教養過程を石山校舎で実施)、将来的な再編案が参加者の間に論議を巻き起こしました。

学生にとっては勉強、課外活動などに、当然大きな支障が出てくることでもあり、教官、職員を含めて、それぞれの環境が今後どのように変わっていくのか課題と不安を抱えているところ。しかし、当面変化の時期はまだ先だという見方が学生の大勢を占めているように行われますが、滋賀大学の新しい行



き方に、学生はどう積極的に関わってゆくかを真剣に問うてゆかねばと思っております。

編集室 所感

ひとつの目標に向かって取り組むときのエネルギーを、ひしひしと感じさせられた一時でした。

平成十四年度総会をアレンジした大十四回卒生諸氏の、「総会成功」へ向けての苦労話をお聞きしながら、「陵水」仲間の結束力未だ衰えず！を痛感した次第です。今度の総会がこうした企画の中から新たな会員層の参画を通じての新しいうねりになってゆくことが期待されます。

大学の独立行政法人化問題も文部科学省からの方向づけがなされ、具体的になってきました。総会での宮本学長のご講演にも注目が寄せられるところです。

高商本科十回卒業の元オリンパス光学工業社長北村茂男氏が逝去され、当会の巨星またひとつ墜つの感強しです。ご生前のご活躍の一端をお偲びしたいと、同社に資料をお願いしたところ、快く掲載の弔辞をご提供いただき、本紙として面目をほ

どこそすことができました。

「東京陵水」に寄せられる会員各位からのご要望のなかに、情報の発信源としての役割を担うご意見があります。編集室としても、今後とも「頭」と「足」をフル活動させて頑張りたいと存じますので、皆様のご協力をお願いいたします。ご寄稿、ご要望、情報の提供等々大歓迎です。(S)

「会報」原稿・情報ご送付先

林 史欣(大8)

〒164-0014

中野区南台二一五一〇

(TEL・FAXとも)

〇三—三三八—四四三二

※編集室のメールアドレスを

kyrys.press@excite.co.jp

としましたのでご利用下さい。

(次号分メ切日 十月末日)

発行所

〒231-0801

横浜市中区新山下3-9-3

陵水会東京支部 支部長 小池英夫

電話045(622) 2686

印刷所

〒110-0015

東京都台東区東上野1-28-3

船舶印刷株

電話03(3831) 4181



首都圏では
4月1日から
新・朝刊

産経新聞の**情熱**を、一人でも多くの人に**判ってもらいたい。**

そんな思いから生まれた「ウェブ産経」。
私たちとともに、ウェブをおこしませんか？

産経新聞の**ウェブ**は、
喪失した日本人としての**誇り**、
明日の未来を育む子供達への**教育**、
世界の中の**日本**……

ひとつひとつのウェブをことば、アクションにかりたてる、そんな活動を展開しています。

いつだって、**産経新聞**は、考えてきました。

これからは、

あなたにも、考えてほしい。

もういちど、**本気で、日本の未来**を考えて……

首都圏では月2950円の朝刊紙。単行本2～3冊買ったと思えばお釣りがきます。ますますむつかしくなる時代に、実に実りある投資ではないですか。



知りたいことは、何ですか。



PEANUTE © United Feature Syndicate, inc.
www.snoopy.co.jp

後藤佐敏(短13回)・中田雅博(大27回)・小松登士夫(大27回)・飯塚浩彦(大29回)・川田尚市(大35回)・加田智之(大49回)。私たちは、産経新聞で働いています。「ウェブ産経」へご入会希望の方は、〒100-8077東京都千代田区大手前1-7-2 産経新聞東京本社 TEL03-3275-8134 FAX03-3279-6342まで。産経新聞を購読されている方、もしくは一年以上購読いただければどなたでも参加できます。会費は無料です。

月ぎめ購読料2,950円(東京本社発行地域のみ)。一部売り100円。お申し込み☎0120-81-2950 www.sankei.co.jp/reader/

6ヶ月以上新規ご契約・ご愛読の方にさしあげます。オリジナル・スヌーピー・トートバッグ2002年6月30日まで/東京本社発行地域にお住まいの方に限ります。/ご愛読者の方で、購読契約時にすでに別の景品提供をお受けの方は、規定により対象外となりますのでご了承ください。価格はすべて税込み数字です。